



桃譜為一集

全



俳諧百一集序

俳諧百一集序

越中康工選

歌也百人一首あり連弄也連弄仙ありそ是也分そる
多ありそと 此邊也糖心ぬく心も 一と暮ら今
は手言此感乃ありありそるそるその人そと画さ然夕
師と伴さ友と毫さるそ 何とぬくも是く是也乃
俳友 手も加る松木也のそるそ 是也 永三
頃也守武ありそ文也宗鑑寛永也貞徳貞室も
也立圃宗頼季也寛文也宗因かく世に也先達有と

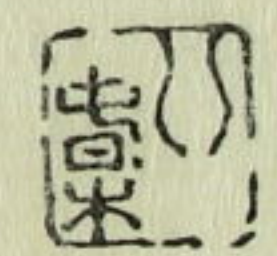
以之其體一子中出下下——爰中桃音初之正也之實
眼前乃その中不易乃其心——みとる之流行之中
中有り教る乃體を形——其妙境と踏く天下幾
芭蕉風中飯杜子西行とて中々——古今乃名師
向子門人中去來有之實情を——其角天草嵐雪
涼菟北枝各よく翁乃其神とくを許六中又あり
其考中其雅乃血脉と流し附句之頃乃一人中——万騎
中中下二三中あり中頃乙由出之滑稽自在乃古有之

朽の中其風流とあり今も海内その中ありとて
中の中ありとてその中ありとて其造化乃神
とてとくありとて——且其眼力乃ありとて其世
鳴也作者も秀逸と見えたり——乃其才子もありとて
一句乃其く是ありとて中て載之則百一集と題する
や注ありとて其くけり——其古人もありとて其句く
乃意乃其く其く筆舌中用ひて其く説く——其く
初學乃人乃其く其く其く其く其く其く其く其く其く

ちつきころその一二と述ぶのこ

寶曆十四年甲申夏五月

八椿舎自序



芭蕉

水乃春

心

蛙氣

古池や



吟の意味や有らん吟一々なみを流し
唱へたるをみ自れと何の中日中へ下りても
外へ凡そ乃及し不承し何の故に新と小く
終末の信と一保一

元朝也

神代

乃

事

思

守武

此神職や古代よりあり

此源とほり



乃山

宗鑑

之

物

乃

乃

元朝

今乃世をきくくきく
世乃胡をくく



月也

乃

家

乃

乃

影法師 負徳

名家乃手匠



空

乃

乃

乃

乃

望一



常小耳と目小一、
万物と考、
心泰山乃

是者くと

さうり

花乃

乃山

貞室



妙境木のり
芳世乃ぬ人乃目七弄
此一句小此山乃教景

立圃

一呼

呼是乃

中乃

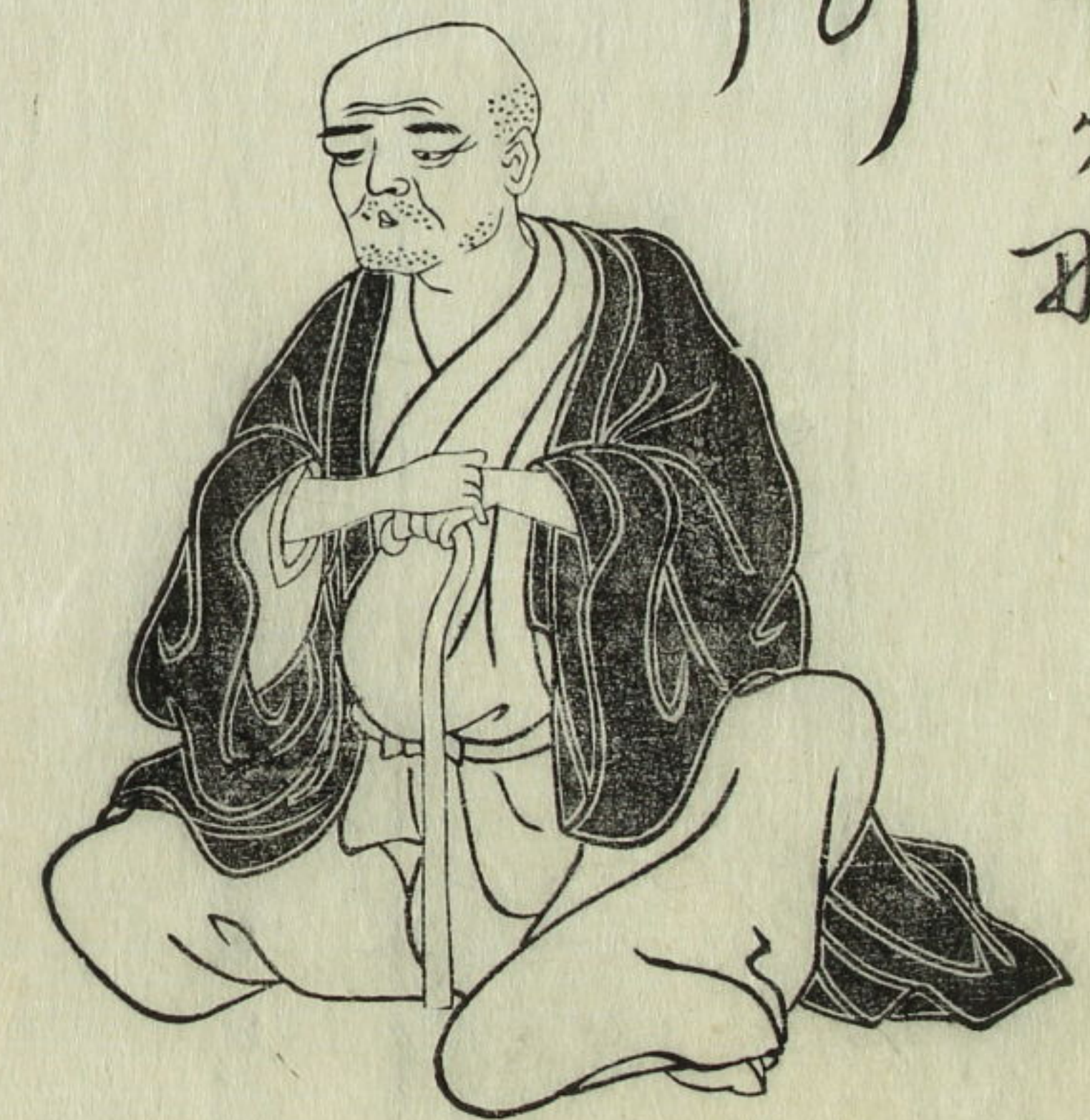
衣織



匡月乃吟小
云也
一
衣
世乃
調
を

反非々那

重頼



順禮乃

持をり

草乃くく上へ持乃之
形是た枝也
枝乃
いと
真阿之

花乃の如

季吟



一僕と

ふくく

詞路我とわう一
味ふくく一
意亦
はき

三才の如

湖春

師走

と云ふ交

山

乃土乃



一乃乃塩梅の四季乃

風流を
お免る塩能へ

白
之
務
也

其分

別

乃

宗因

宗因



為可手乃拙者流也

稲妻や

このふい

東

子

西

其角



秋乃秋乃のりり
吾いふおまや又いふるんと世乃こは
記しつらち通ふ心乃らまゝ者人と
恨るる詞と殊しつら乃意味と含
絶作こ

夕方見龍

鳴川

声小

牛呵る



自れと眼乃前
妙なる衣三
人より腸と断し

嵐雪

東山

たつたや

たつたや

蒲團



象リ乃深小一と謀り
平安乃景之る度り

中 聞ふ

應くとん

ちくや

高

乃

門

去来



隨聞記小曰

夫州支考曲翠正秀其角許六お乃く称嘆
何是とも爰小略去来善曰悟 句さ参やた之自賛小
曰此句小自悦と寂乃乃くぬると才一とらひ侍り物中
翁乃句ハ強も弱も何るも者重句もソつて是も此寂乃
附ると皆くちや心取しと

福
野坡

結
乃

垣
乃

此
乃

可
よ
流



月
乃

青
葉

山
郭

乃
乃

素
堂

鐘
乃
乃



浅き砂川

竹

乃

意

秋

冬

山

杉風



言

乃

木

意

乃

秋乃雨

尚白



細らうホーし物とにこるふ
そぬ実情とあまんまー

子も何ん
信徳

生か

今月

名月々



難陀集の曰今年就中賜先断
と白氏乃年と悲し〜の意も
かひなく老乃き〜
よも〜ち〜け〜るの詞

春乃

子

く〜

乃



鬼貫

何れ〜
春乃乃
時節乃

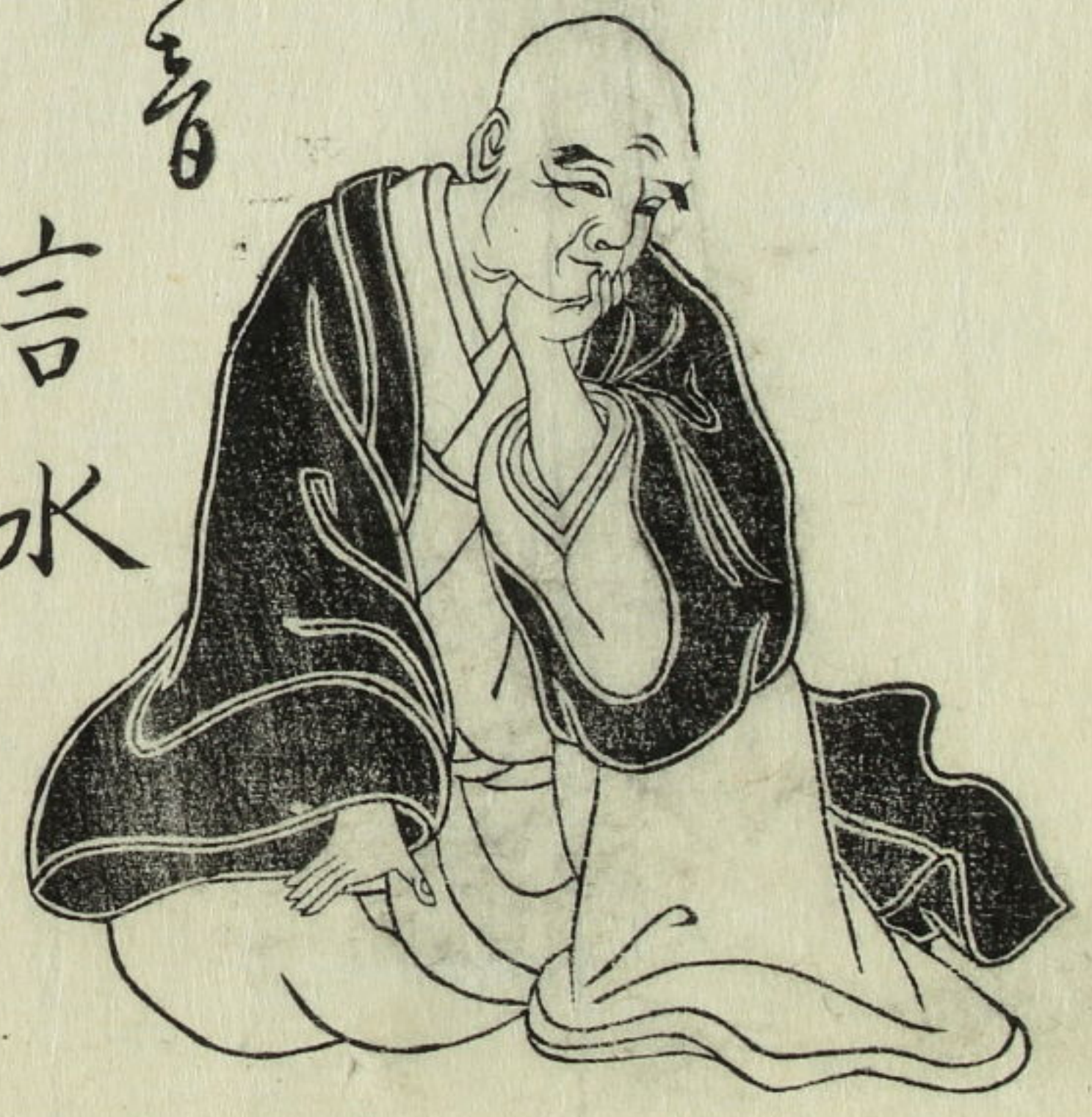
風乃

果

看

海乃

言水



世々々々々々
風乃言水と稱す
則碑乃銘小孩

表

表と

ちり

手

木因



たさくふまふ
たさくふまふ
たさくふまふ

あはれに一笑

あはれ

雨

あはれ



あはれ乃は雨を降る人なり
又あはれは他意なり

大乃

月

あはれ

七
十二

任口



あはれは八月と云ふ
あはれはあはれを云ふ乃昔男乃金声小
仍く七十二と云ふ此上人乃年々
詞花を承きて云ふ乃云々

唇子

了

児乃

さきみ

千那



篇突山曰くわくわく。石小
多拙と云く。情も一復一与と感ふ
情ふ是とて。翁も一復一与と感ふ

那 木節

老木

る

しけ

花咲



百花乃中より
玄より自然乃
寂と唱へ感らる

月夜の如
露川

海乃

分別也



心も初も及ぬ海原とてを月乃にらひと依ま
彼都良香々
三千世界眼、前ニ盡又と
海乃をさへく

枝竹也

音る

二

三本

万子



母くと入る
意味不詳
海棠の香なり金橋不敵なり

高次可也

秋之坊



月之秋

為う家と云ふ事
此位常と閉口不似る

三三三

余

三

梅
花

尼
智月



上
言語道断乃可也

麻から紙

踏と紙

宵戸

の

月乃の形

浪化



平無辨小似く推民乃
意向く上人乃為悲を縁とく

秋乃屋

正秀

子

分乃

約針や



殺生乃法よゆみちちのま
秋屋乃ありま一入小

うらやま

おとよ

切

時

猫乃意

越人



浪化君乃真書小曰
定家々乃

うらやま
世もあはれ
のう猫乃とてふんぞ

尼
坂之乃
芳樹

秋乃

中

焼く

等乃さや



佛門小を乃乃うへ乃意
皆白まきこ二章をその所とほく

解悟

牛乃角

句空

墨書

入分

梅、香、也



梅乃けりてふはなはなとてしり
下又ふりし十月とふりてしり

秋乃雨

凡兆

下京也

高積の



浪化君乃聞書う回上又と
るにふりてしり十月とふりてしり
るにふりてしり十月とふりてしり

まなま

あま

あま

糸紙の

是式部、伊弉諾、真、董、の、一、
手、毛、と、乃、
是、と、お、お、
孰、



その

友吉

あま

四角

月

天科乃

月、四角、ふ、け、と、
と、光、も、ま、み、く、と、
一、作、よ、く、田、毎、と、
人、と、ヤ、ハ、リ、

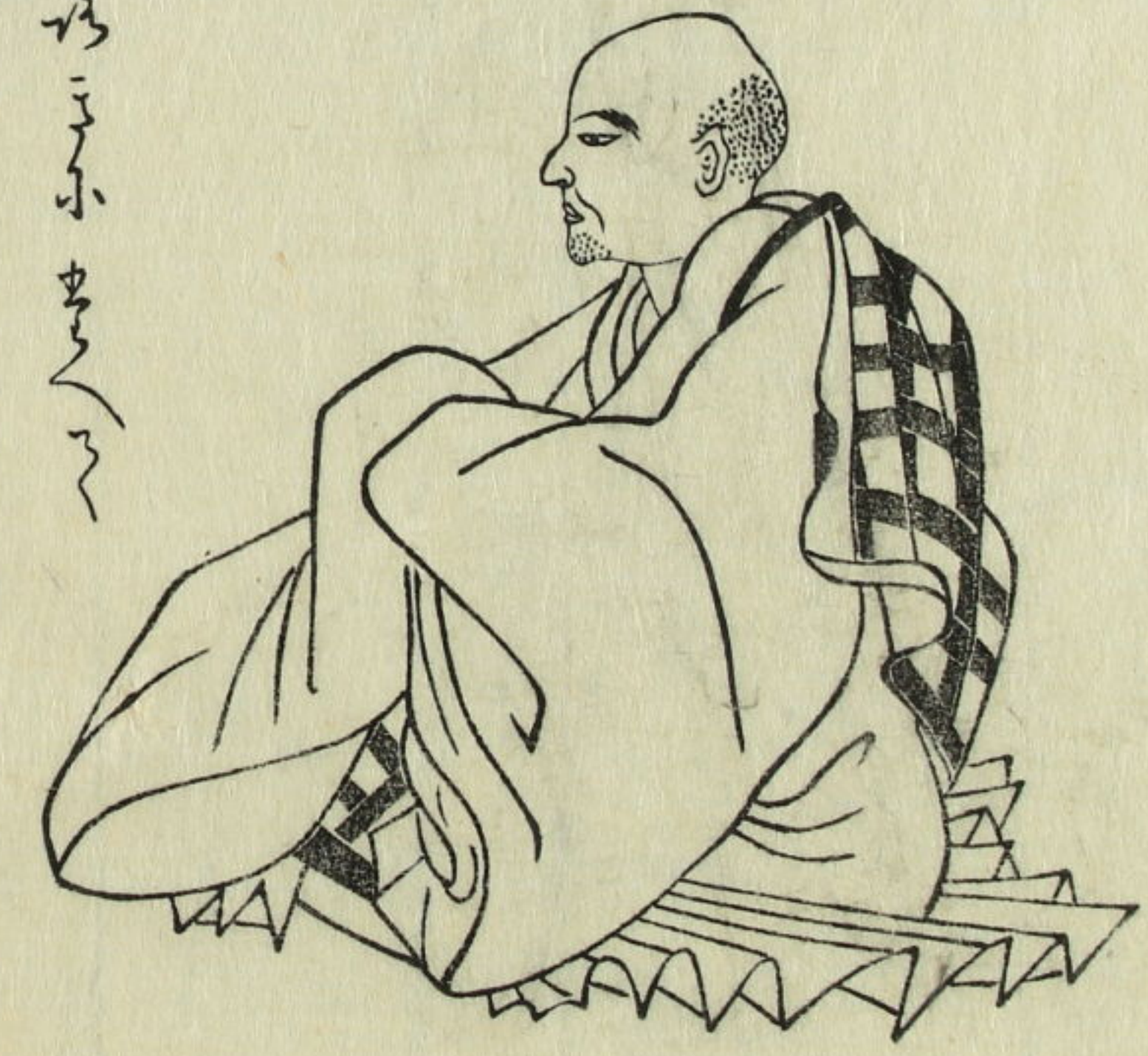


けりし木子由

時乃

心色

日枝



其景かましつる小まへ
心んさかく
影る
けはるん

水乃音 木導

心

中

麦乃

春乃



宇陀法師小曰師说不奈曲才一乃句之
後代手存まろへし
同考いし心花乃糸口
と子脇し
まひし

了子母成之

三葉

はく

ら

おと

二水



花のついでに花とておどろき花のま

たをちりまきしるふ家乃乃放逸も

い屋のり小

男

一秋

之孫

乃

山

とよ



世にやみし一秋之孫小乃

歌屋乃迷詠小乃乃乃

まにまに

秋乃松 和及

通り色

大石乃



ふふやのふの松の子をいさ各別
松乃標乃古今ふ手本をいさむ
意味多し

ふふり 重軌

浮き

世上小

花あそ



浮きより 浮き小出

ほろり

女之節

教之

身也

粟乃種也

すて



不易乃功ありて是く心ありて

子

子

依也

中

秋乃

とめ



臣流不貞あり實あり
此婦人乃心もいふも
知るる

志疎猶あり

枯

思

血

梅乃其

從吾

虚有り實有り
寂奇く



夕暮も

暖も

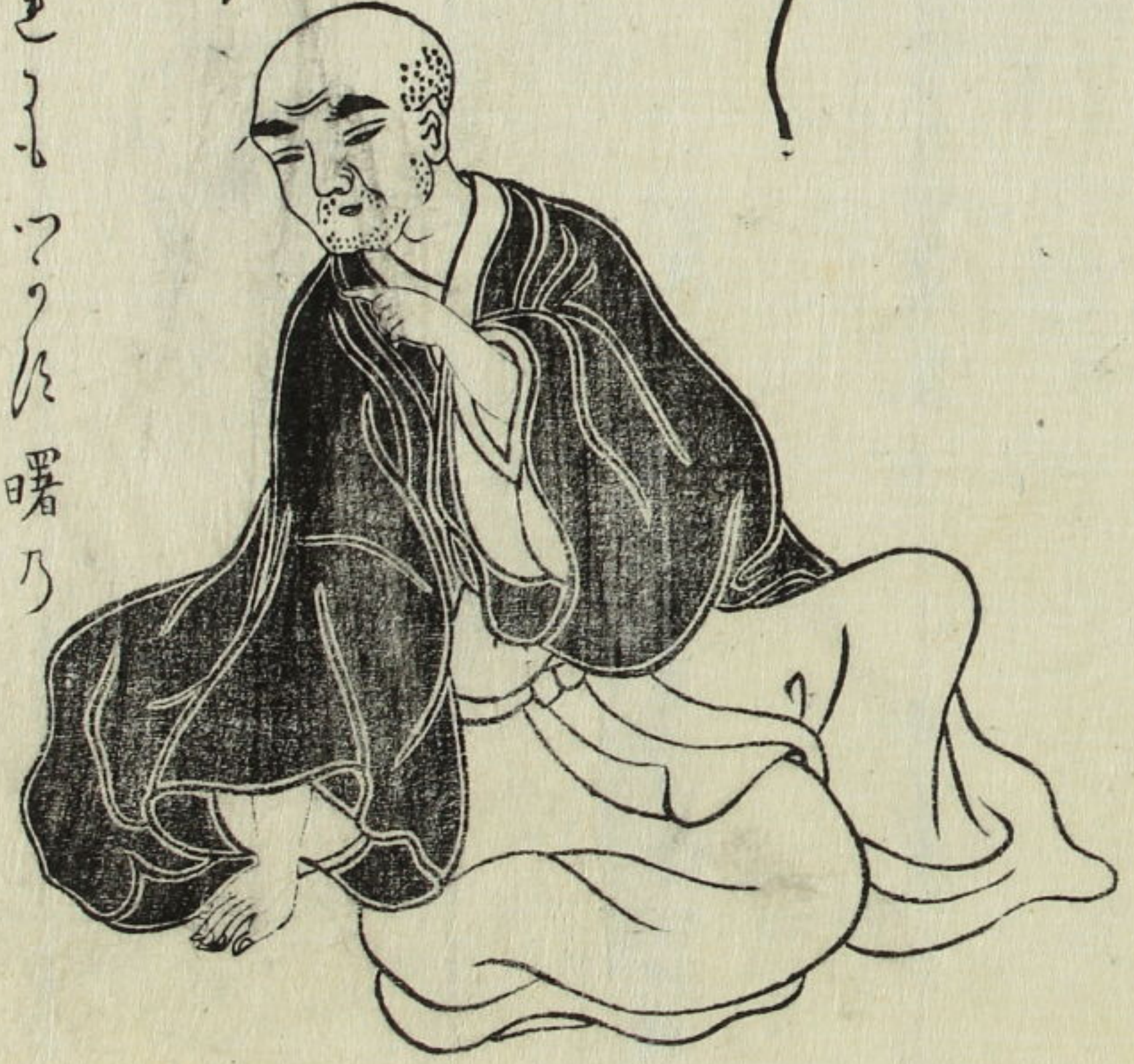
水

鶏足

美

巴静

秋乃夕乃乃あり色もつらげ暖乃
くもやのちぬくと鶏足乃らつら
くの姿とそのまふ速く意ありそこ
くく乃
清く静くほたり



心とては

消す

心

石焼

地底に消す一と
自らやと持ては乃一声古
著取小玉乃乃
正一
み又

辨三



鬼士

秋意の

心

持ては

初霜也

陽氷とては
初霜也
老乃



涼

乃

もとの

神

山

素心

尼

素心



なつ乃素心おしつつけも
うねしゆゆ乃時乃ゆゆ
しふ

曉

乃

中

乃

乃

乃



此子、ゆゆゆ中
此實境ゆゆん
ハ

山路之形

石物心之

鳴

籬子

常も動り白山路乃つて
声とくもくもく
いよく閑寂ふ

司鱸



将くと

比叡乃

去るもくもく

衿う形

舎朶



如と坊主子乃哀情と
形く目睫連乃
昔もくもく

桃乃花

ちりり

鶏乃声小

鶏合乃かちとまを作
いさひひあつこ
ちりり物珠

春波



おそ

ちりり

橋乃

ちりり

素風



橋乃涼
あつこ
サカサガ乃威あり

子鳥少 杜 荻 友

ふん

とと

人 者

砂 子 子



臣相奇 築 中 一 一
刻 方 長 一

喜 乃 色 秋 瓜
所 子
細 之
青 柀 也



曲 節 自 在

箱

箱

星 恋

時

蒼 家

麻父



切切と不堪聞
都立しと海草乃星
あまらる乃侍とそく
ハ乃字乃侍と言外乃
可なりと旅情とありて

何とんぞ

声乃

鈕や

秋の

雑

岸虎



自他と物凄

心細

蘇乃花

噴

日

乱

禹洗



蘇乃句やおきてハ
其ニ乃珍作と

一一一

音乃秋の

面流

ヤ

ハ

生可



きけ者

目

知中

芳

中



柳

左菊

麦林師乃評
方山乃花ハ
細工乃
實系

ツカガ乃

灯と

中



鳥醉

一點ノ漁燈
香露ノ中
鳥醉

燈火と

己の心

清く

夜乃

鳥

蓼太



寐さめ分と母分う免く
心と沈しきる此夜は人

見風

人
みく

中
産中

待
育也

形中し望望乃月と云ふ
於寐中し望もくく下みま
よく働真子
滑巻乃おる一みく



凉代衣



衣乃乃

里也

多衣

鳥

衣乃乃

衣乃乃
衣乃乃
衣乃乃
衣乃乃
衣乃乃
衣乃乃
衣乃乃
衣乃乃
衣乃乃
衣乃乃

晚九



衣乃乃

衣乃乃

衣乃乃

衣乃乃

衣乃乃
衣乃乃
衣乃乃
衣乃乃
衣乃乃
衣乃乃
衣乃乃
衣乃乃
衣乃乃
衣乃乃

味衣乃乃

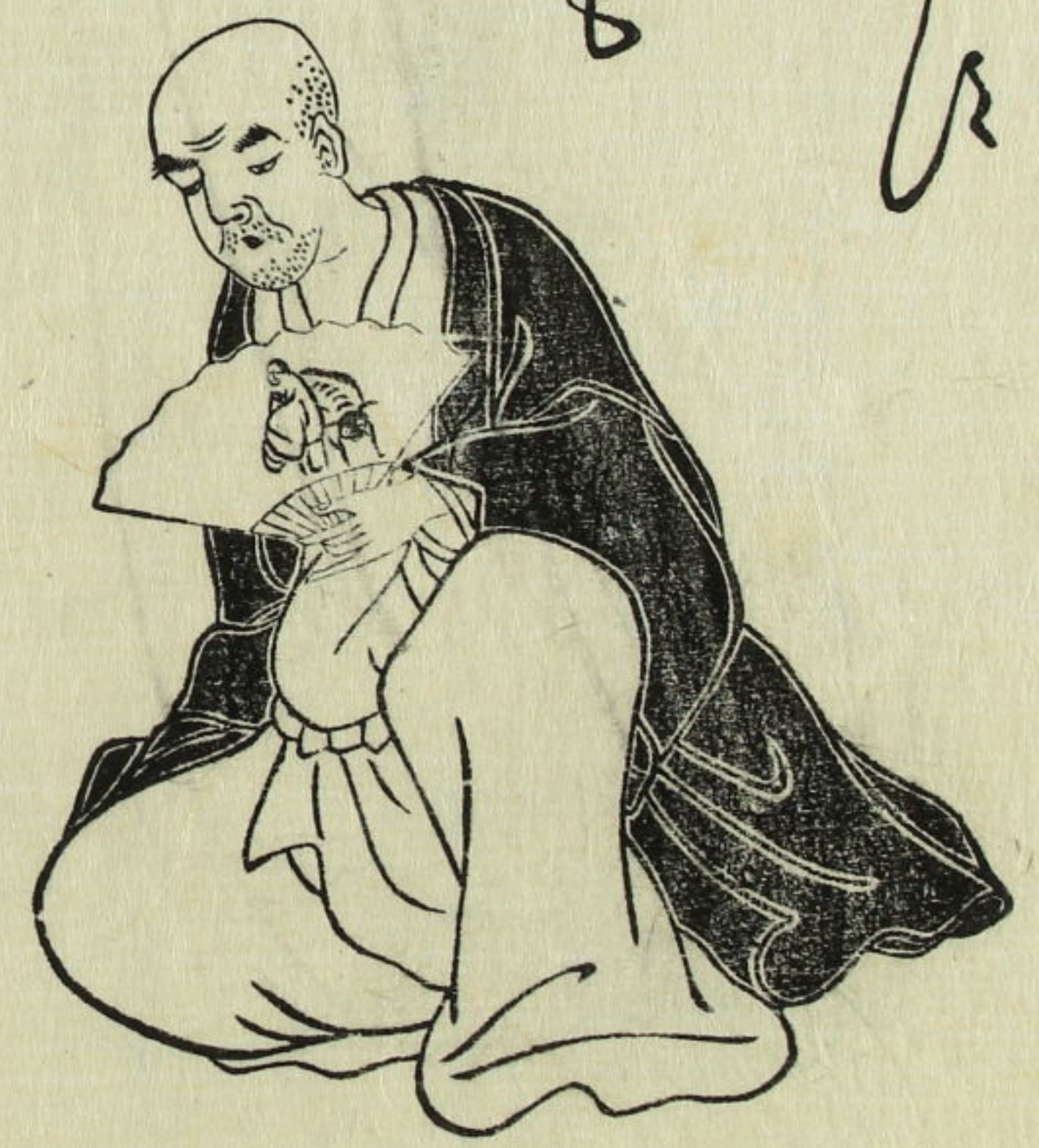
百々あり

也右

一巻も

とちの

己多能也



夕部能乃とままを
含くを呉と歌し
作念流るる

結

を

婦

い

女

封



お説ふと乃と善をうけり
大急が髪々ありてけり

其汀

其苦の如

其苦の如

其苦の如

其苦の如

其苦の如
其苦の如
其苦の如
其苦の如
其苦の如



交琴

其苦の如
其苦の如
其苦の如
其苦の如
其苦の如

其苦の如

其苦の如

其苦の如
其苦の如
其苦の如
其苦の如
其苦の如

其苦の如



招原一

落心

ととや

乃河

門瑟



哥仙小も遍昭と
琴上うのまをくまをくく

日
中乃

花

静

純乃

麥水



花乃うハ多キハ世乃人ハ多ク
越向を改し其泥中乃蓮乃

梅乃花
闌更

中

乃

山陰



乃花けそそのまけりきん
善景三つと眼中小阿呈

山家
可枝

あむ

きん

乃

鳴
佐
乃



中古乃風骨とほまらま

生盡く形

汪由



長らハ此小

櫛乃

進退花小執心一くおもむ
くむきるなり正備あり候
やま一くおもむるなり

穢ハヤ

音乃

あ

う

物ハ

既白



音とつひく曉出山乃正体
穢ハ此小執心一くおもむ
やま一くおもむるなり

初鴉

三ツ

四ツ

あ

あ

り

馬明



法少の抱小ア、
そのまゝとく、
幕画乃、
草野、
るの心、
地、
を、
ら、
る。

禪 叩 或 靜

高

あ

あ

さ

あ

該笑、
寂色、
何、
里。



梨乃花

咲く

三

唱

鐘乃

康工



梨乃花も乃も咲く世に評と
清人きりぬ爰不毫と授ぬ

夕
夕
員
栞居

あ
あ

竹

梅



人をもてききりりり客来り
心と世小涼りり真ヤりり
月情を優長也

盧元

初事乃如

持

以

乃



大事不立ひふやーきま
さほちかっー乃乃いふ事と
作りかっー一字乃新ーふと
そつらっせり

業
船
乃

立
枝
も

ま
や

羽
を
船



希
因

死ーまの物と
活ーその安眼前ホ
何くくといはれり
忘るも立枝ま乃字
以つ是も飾
優不けり
ちのつ
まけり

飛くや 麥林

ふむ

家も

人二名



その心乃ち... 天性不思議

神境と云ふ

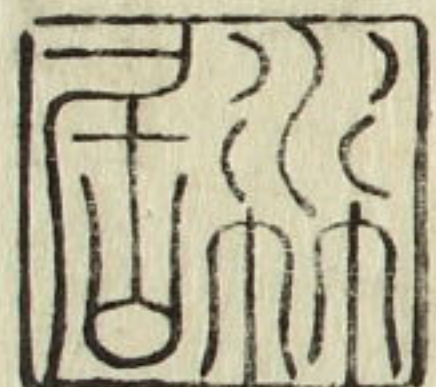
辨林百一集跋



余嘗善辨之言淡而不厭簡而不
文亦立之之次蓋原也乎古國風
之變之來也尚矣繼作有人而
挑者者興焉其風大振日鍊月
鎔愈出愈奇噴吐之頑也夫
性靈之發於天機者於素

籥之生也吁呼喟應變現无
究以陶冶性情發泄渣滓豈
之无裨於世道乎哉今斯
篇也无名生一曰生百而吹
箏不同亦可知予康工民困
心不謂深於素籥之功而濯
于治之中者余未知誰之至

矣者但知其簡而文沈而不厭
之為可善焉而已是為鼓
瑟水竹散人出



1765

七
七

明和二乙酉季四月

京寺町通二條下町

橘屋治兵衛梓

